

## 西躰かずよし

今回の口語詩句賞の応募は42名であった。年々、応募者数は増加しており、そのなかには、すぐれた作品も多くの見られた。他の賞と比べた場合、応募者数が少ないようにも見えるが、応募の要件を満たすには、口語詩句投稿サイト72hに投稿し、そのうえで佳作選考された作品のうちから10作品を応募しなければならないのであるから、既に応募の時点でふるいにかけられているといつていいだろう。複数の選考委員がいるとはいえ、年間をとおして投稿を続けながら佳作に選考されたものを10作品以上得るというのは決して簡単なことではない。そういう意味では応募資格を満たす時点で、書き手は一定の力量を有するといえる。

今回の応募は、社会人が多かつたということに起因するかもしれないが、10作品を並べた時、まとまりがあるものが多いように感じた。新人賞は、藤谷真実子氏と大野博司氏との最終選考の末、大野氏の受賞となつた。私は、作品のみずみずしさでは藤谷氏のほうに惹かれたものの、大野氏の作品における緊張感と完成度の高さを評価し、そちらを推した。そのほかの選についていえば、惜しくも奨励賞を逃した青木雅氏や永井貴志氏の作品には表現の新たな可能性を感じたし、奨励賞を受賞した丸山萌氏と山本巧氏の作品は、定型俳句をふまえた表現として、それぞれに代えがたい魅力を感じた。

本賞の応募にあつては、口語による表現という制約はあるものの、俳句、短歌、短詩、またはそれらの混在と、いう様々な表現による作品の提出が可能であり、おそらくそうしたジャンルを超えた募集、評価の取組みは、日本ではこれがはじめてだろう。丸山真男が『日本の思想』で日本の文化、思想が、ジャンルごとに閉じられていることを「たこつぼ型」と評してから随分経つが、状況は依然変わっていない。また、文学は生きていくうえでの根源的な問題に触れる可能性のあるものであるにもかかわらず、昨今、実学以外の役に立たないものとして軽視される傾向が強くなっているのも周知の事実である。皆さんの中から、こうした状況に抗うような、新たな書き

手が生まれることを願つて止まない。

最後に今回の応募作品中、特に惹かれた作品を紹介してしあくくりとするとともに、今後の皆さんの活躍に期待したい。

大野博司（埼玉県）

遺伝子の青の部分を吐き出せば／閉じられてゆくいくつかの窓

藤谷真実子（東京都）

ルリタテハ／入道雲をくいとめて

丸山萌（神奈川県）

左手に異なるひかり宿らせて／並行という永遠をゆく

永井貴志（京都府）

自転車に桜花びらついていて僕に／はさびしいやわらかいだつた

青木雅（埼玉県）

がんばれ他者／がんばれ他者のみなさんが／後生みたいに抱えてるもの

登りびと（福岡県）

ファミチキの揚げたて／雪の駐車場